

梵文『中阿含』のカトマンドゥ断簡

松 田 和 信

まえがき 1922年のネパール旅行から帰ったシルヴァン・レヴィ (Sylvain Lévi) は、その3年後、カトマンドゥのドルバル・ライブラリー (Durbar Library) で見出した、後期グプタ文字で書写された貝葉写本の断簡1葉を漢訳『中阿含』133経 (ウパーリ経, *Upāli-sūtra*) に比定して出版したが、その理由は、同じ年に出版された『唯識二十論 (*Vimśatikā*)』の中に『ウパーリ経』に基づく記述があり、それに関連する同経の梵文断簡を紹介するためであった¹⁾。しかしその1葉は、レヴィが初めて見出したものではなかった。レヴィ自身は気づいていないが、実はその1葉は、それより20年ほど前、すでにセシル・ベンドール (Cecil Bendall) によって調査された、いわゆる「ベンドール写本 (Bendall Mss./Bendall's Puka)」に含まれる断簡だったのである²⁾。ところで、ベンドールの調査した写本の中には、彼の出版した『大乘集菩薩学論 (*Śikṣāsamuccaya*)』の口絵写真でも紹介されている、重頌を欠く散文ヴァージョン『十地経』の貝葉写本49葉——美しいグプタ文字で書かれた、恐らくはネパールに残る最古のまとまった仏教写本——が含まれている³⁾。その後、同ライブラリーの写本を引き継いだ現在の国立公文書館 (National Archives) では、それら49葉のうち、何故か12葉が抜き出されて別な未比定の貝葉断簡11葉と一緒にされ (計23葉)、カタログ未掲載のまま 'Prakīrṇa-patra' なるタイトル (ベンドール写本であることを示す3-737という番号が付けられている) で保存されている⁴⁾。レヴィの出版した『ウパーリ経』の1葉は、この一緒にされた未比定の断簡11葉の中に含まれていることが判明した。ところが、この中には、『ウパーリ経』の断簡と同じ書体・同サイズの断簡がさらに1葉見出される。それが『中阿含』と見なされる新たな梵文断簡である。

テキストと和訳 この1葉は片面に6行づつ書かれ、裏1行目のダンドを境に、經典の末尾部分と、別な經典の冒頭部分が連写されている。筆者の比定では、裏1行目で漢訳『中阿含』第135経 (善生経 **Śikhāḥlaka-* or **Sujātaka-sūtra*) に対応する梵文經典が終わり⁵⁾、引き続いて漢訳『中阿含』141経 (喩経 **Apramāda-* or **Upamā-sūtra*) の対応経が始まる⁶⁾。これに最小限の校訂を加えつつローマ字転

写して、その和訳を示せば以下の如くである⁷⁾。

No. 135 (vi)(r¹)(na)ya(m)ti niveśayaṃti pratiṣṭhāpayamti/śilasampadi
samādāpayamti vinayanti niveśayaṃti pratiṣṭhāpayamti/śrutasaṃpadi
samādāpayamti vinayaṃti niveśayaṃti pratiṣṭhāpayamti/tyāgasampadi
samādāpayamti vinayaṃti niveśayanti pratiṣṭhāpayanti(/) prajñāsaṃpadi
(r²) (sa)mādāpayamti vinayanti niveśayanti pratiṣṭhāpayanti/evam as-
yaiśā gr̥hapatiputrordhvā diś ubhayato bhāgapratichannā bhavaty(/)
ūrdhvaiśā gr̥hapatiputra dig ārye dharmavinaye yad uta dāyakaśya
dānapateḥ śramaṇabrāhmaṇā (/) evaṃ śramaṇabrāhmaṇakalyāṇamaṇaḥ
pratyanukāṃpitasya śrāddhasya kulaputrasya vṛddhir eva pratikāṃkṣita-
vyā kuśalānān dharmā(r³)(ṇaṃ na hān)ir (/) idam avocad bhagavān
idam uktvā sugato 'py athāparam^{a)} etad uvāca śāstā//

mātāpitā diśā pūrvā ācāryo dakṣiṇā diśā^{b)}/

paścimā putradāraṃ hi mitrāmātyam athottarā//1//

dāsakarmakarā^{c)} heṣṭam^{d)} ūrdhvaṃ śramaṇabrāhmaṇāḥ/

etā^{e)} diśo namasyeta āryo 'lam gr̥ham āvasan*//2//

etā diśo namasyeha svargaṇ gaccha[nt]i dā[ya](kāḥ)/

[dā]naṃ ca priyavādi(r⁴)tvam arthacaryā ca yā iha//3//

samānārthatā ca satveṣu tatra tatra yathārhatāḥ/

ete vai saṃgrahā loke rathasyāṇiva gacchataḥ//4//

ete vai^{f)} saṃgrahā na syuḥ na mātā putrakāraṇāt*/

labheta mānanāṃ pūjāṃ pitā vā putrakāraṇāt*//5//

yasmāt tu saṃgrahān etān anuvarttanti dhārmikāḥ/

tasmān mātātmyatāṃ prāpya vyavalokyā bhavanti te//6//

ni[vāta]vṛ[tta](r⁵)(m a)stabdham svālapam akhilam ṛjum^{*g)}/

śrāddham śilena saṃpannam tādrśam bhajate hi śrīḥ//7//

utthātā yo hy analaso vadānyo^{h)} vītamatsaraḥ/

naro netā vinetā ca tādrśoⁱ⁾ (labhate yaśaḥ)//8//

+++++ ++++++/

++++ -vanatā ca tādrśo labhate yaśaḥ//9//

ś(i)lpa(m) prathamataḥ śikṣet tato bhogān upārjayet*/

tato bho(gā)n upārjitya caturdhā vibhajed dhanam//10//

ekena^{b)} bhogād bhū(m)jita dvābhyām karmāṇi kārayet*/
 caturthaṃ saṃnidhātavyaṃ yad āpatsu bhaviṣyati//11//
 kṛṣir vāṇ(i)jyā go-^{c)} rakṣyaṃ caturthaṃ paśuvardhanam*/
 āveśanam (ca) pañcamam ṣaṣṭhaṃ kuryān niveśanam*//12//
 ṣaḍaṅgiko gṛhavāsaḥ suprayuktaḥ sukhāvahaḥ/
 evaṃ sukṛtakarmāntāḥ paṇḍitā ye 'rthacittakāḥ//13//
 bho(gā)s [t]ā... ..(r^e)[ni]sravanty iva^{k)} sāgaram*/
 evaṃ saṃharatām teṣāṃ bhramarāṇām yathā madhu^{d)}//14//
 valmika iva vardhamte bhogā rātriṃdivaṃ nṛṇām*/
 na vṛddhāya dhanam dadyān nāpi pratyantavāsine //15//
 na raudrapāpakarmabhyo na balibhyaḥ kathañcana/
 kṛtyam eva sadā kuryā[d akṛtya]m ..[vi]varjayet*//16//
 kṛtyakāri [puru]ṣaḥ śobhate 'g(n)ir i[va j](vala-)+++++
 ++/(v¹)(^m...*mitrair amātyaiś ca tathā suhradbhiḥ sālohitaiḥ*++++
 +++//17//
 +...^{m)} [jñāta]madhya(ma)rṣabhoⁿ⁾ yath[ai]va datvā ca bhuktvā
 ca yathārham eva/prāpto 'pi martyo vaśam antakasya sthānan
 tato divyam upaiti nityam*//18// idam avocat*//o//

No. 141 § 0. evaṃ mayā śrutam ekasmi[m] samaye bhagavāṃ cchrā-
 vastyām vi[harati je]tavane 'nāthapiṇḍadasyārāme (/) tatra bhagavā-
 (m) bh(i)kṣūṇ ā[mantra](yati sma /) § 1. (ye kecid ane)(v²)(ka)[vidh-
 āḥ] kuśalā dharmāḥ saṃbhavanti sarve te apramādamūlakā apramāda-
 samudayā apramāda-jātiyāḥ apramādaprabhavāḥ (/) apramādamūlakā hi
 ye kecid anekavidhāḥ^{o)} kuśalā dharmāḥ saṃbhavanti/ tad yathā bhikṣavo
 ye kecid audārikā^{p)} balakaraṇiyāḥ karmāntāḥ kṛyamte sarvve te pṛthivīm
 niśṛtya pṛth[i]v[im] (pratiṣṭtheyuḥ /) § 2. (e)(v³)vam eva ye kecid
 anekavidhāḥ kuśalā dharmāḥ saṃbhavanti sarve te apramādamūlakāḥ
 apramādasamudayāḥ apramāda-jātiyā apramādaprabhavāḥ (/) apramāda-
 mūlakā hi ye kecid anekavidhāḥ kuśalāḥ dharmāḥ^{o)} saṃbhavanti/tad
 yathā ye kecid bijagrāmabhūtagrāmauśadhitṛṇavanaspatayo virūdhīm
 vṛddhīm vipulatām āpadyamte sarvve te pṛ[thi](v⁴)vi[m pra]tiṣṭtheyu-
 (ḥ)/ § 3. evaṃ eva ye kecid anekavidhāḥ kuśalā dharmāḥ saṃbhavamti

sarve te apramādamūlakā apramādasamudayā apramāda-jātiyā apramāda-prabhavāḥ (/) apramādamūlakā hi ye kecid ane(ka)vidhāḥ kuśalā dharmāḥ saṃbhavanti/ye kecid mūlagamdhāḥ kālānusārīgandhas⁷⁾ teṣāṃ agra ākhyātaḥ (/) § 4. evam eva(v⁵⁾) (ye) [ke]cid anekavidhāḥ kuśalā dharmāḥ saṃbhavanti sarve te apramādamūlakā apramādasamudayā apramāda-jātiyā apramādaprabhavā (/) apramādamūlakā hi ye kecid anekavidhāḥ kuśalā dharmāḥ saṃbhavanti/ye kecid sārāgamdhā lohitacandanā teṣāṃ agra ākhyātaḥ (/) § 5. evam eva ye kecid anekavidhāḥ kuśalā dharmāḥ saṃbhavanti(v⁶) sarve te apramādamūlakāḥ apramādasamudayāḥ apramāda-jātiyā apramādaprabhavā (/) apramādamūlakā hi ye kecid anekavidhāḥ kuśakā dharmāḥ saṃbhavanti/yāni kānicit sthala-jāni mālyāni vārṣikā mallikā teṣāṃ agrākhyātā/ § 6. evam eva ye kecid anekavidhāḥ

a) Ms. 'py āthāparam. b) Ms. diśaḥ. c) Ms. -karmakara. d) Ms. heṭhad-. 'Ṭha' is written in the lower margin of the folio. e) Ms. etāni. f) Ms. ve. g) Ms. akhilaṃ nvajum*? Tentative reading. h) Ms. vadanyo. i) These lines are written in the upper margin of the folio. j) Ms. kena te. k) Ms. -sравantya iva. l) Ms. madhuḥ. m) It seems that these lines are written in the upper margin of the folio, but are damaged. Italics parts are taken from Turfan Fragment Kat. -Nr. 412(30). n) Ms. madhyaraṣabho. Madhyama or ṛṣabha means a scale in Indian music. o) Ms. ekaikavidhāḥ. p) Ms. audārikaudārukā. q) 'Dharmāḥ' is written in the lower margin of the folio. r) Ms. kālānusārīgandhas.

[135経] …[上方に相当する沙門・婆羅門は五つのことの中に家長の子を導き、案内し、入らせ、止まらせる。すなわち] (1)…(2) 戒円満 (śīla-sampad) の中に[家長の子]を導き、案内し、入らせ、止まらせる。(3)聞円満 (śruta-) の中に…(4)布施円満(tyāga-) の中に…(5)慧円満 (prajñā-) の中に…。家長の子よ、このようにして、この上方は双方から部分として守られます。家長の子よ、聖なる法と律において、布施者・施主にとって、この上方は、すなわち沙門・婆羅門なのです。このようにして、沙門・婆羅門に好意を持ち、哀心を持ち、信仰を持つ良家の子にとって、繁榮 (vṛddhi) は約束され、善法が消失することはありません。このことを世尊は言われました。こう言われてから、善逝にして師であるお方 (śāstr) はさらに次のように語りました。

[1] 東方は母と父 (mātā-pitr) であり、南方は師 (ācārya) であり、西[方]は子と妻 (putra-dāra) であり、北[方]は友人と親戚 (mitra-amātya) である。

[2] 下方 (heṣṭa) は下僕と雇い人 (dāsa-karmakara) であり, 上方は沙門と婆羅門である。これらの方角を在家の聖者 (ārya) は礼拝すべきである。

[3] この世でこれらの方角を礼拝し終わって, 施主 (dāyaka) は天界 (svarga) に赴く。この世における (a)布施 (dāna), (b)愛語 (priya-vāditva), (c)利益行,

[4] (d)それぞれの衆生に対する正しく平等な利益, あたかも回転する車 (ratha) のくさび (āṇi) のように, これらが世間における〔四〕摂〔事〕である。

[5] これらの摂〔事〕がないならば, 母は子の因にならないだろう。あるいは〔これらがあって〕尊敬と供養を獲得するならば, 父は子の因となるであろう。

[6] 徳ある人々 (dhārmikāḥ) はこれらの摂〔事〕に従うから, それ故に偉大さ (māhātmya) を得て〔世間の人々から〕見られるべき人 (vyavalokya) となるのである。

[7] 行いを慎み (nivāta-vṛtta), 謙遜し (astabdhā), 良い言葉を持ち (svālāpa), 欠陥がなく (akhila), 正直で (ṛju), 信仰を持ち (śraddha), 戒 (śīla) を備えた, このような人を幸福 (śrī) は選択する。

[8] 決意する人 (utthātṛ) であり, 怠惰でなく (anayasa), 寛大で (vadānya), 嫉妬せず, 指導者にして教師である人 (vinetr), そのような人は名声を得る。

[9] ……………[欠落]……………そのような人は名声 (yaśas) を得る。

[10] 最初に技術 (śilpa) を学ぶべきである。次に収益 (bhoga) を得るべきである。収益を得てから次に, 財産 (dhana) を四分すべきである。

[11] 収益の四分の一は消費すべきである。四分の二で仕事をすべきである。四分の一は蓄えるべきである。逆境 (āpad) の時に必要だから。

[12] 耕作 (kṛṣi), 商売 (vāṇijyā), 牛の放牧 (gorakṣya), 第四に家畜の飼育 (paśu-vardhana), 第五に接待業 (āveśana), 第六に建築業 (niveśana) を行うべきである。

[13] 六支よりなる在家生活は, よく計画され, 喜びをもたらす。このように, 賢者 (pañḍita) たちは良くなされた仕事を持ち, 利益心を持つのである。

[14] 収益…[欠落]…[水が] 海に流入するように, また蜜蜂 (bhramara) たちが蜜 (madhu) を集めるように。

[15] 蟻塚 (valmika) のように, 昼夜にわたって (rātriṃ-divam) 人々の収益は増加する。年長者 (vṛddha) には財産を与えるべきではない。辺境に住む人にも。

[16] また決して, 凶悪な行為をする人々 (raudra-pāpa-karman) にも, 力のある人々 (balin) にも〔与えるべきではない。〕なすべきことを常になすべきである。なすべきでないことは避けるべきである。

[17] なすべきことをなす人は浄らかとなる。あたかも火が火焰を…[欠落]…。友人 (mitra), 親戚 (amātya), 親友 (suhṛd), 親族 (sālohitā) たちによって…[欠落]…。

[18] ド (madhyama) やレ (ṛṣabha) の〔音階を正しく〕知る者のように, 正しく

〔財産を〕与え、消費すれば、たとえ死の支配下に達して死すべきとも、そこから常に天界(divya)へ赴く。

以上のように「世尊は」語りました。

〔141経〕 §0 このように私は聞きました。…そこで世尊は比丘たちに語りかけました。

§1 多くの善法が生じて、それらはすべて不放逸 (apramāda) を根本 (·mūla) とし、不放逸をを原因 (·samudaya) とし、不放逸を種 (·jātiya) とし、不放逸を根源 (·prabhava) とするのです。実に、多くの善法が生じて、不放逸を根本としているのです。例えば比丘たちよ、広範囲の力がある畑仕事 (balakaraṇiyāḥ karmāntāḥ) が行われても、それらはすべて大地 (prthivī) に基づき、大地に寄りかかっているように。§2 同様に、多くの善法が生じて、それらはすべて…。例えば、種子の集まり (bīja-grāma)・植物の集まり (bhūta-grāma)・薬草 (oṣadhi)・草 (tṛṇa)・木々 (vanaspati) が育ち、成長し、大きくなるが、それらはすべて大地に基づき、大地に寄りかかっているように。§3 同様に、多くの善法が生じて、それらはすべて…。例えば、根〔を用いる〕香木 (mūla-gandha) の中で、黒梅檀香 (kālanusāri-gandha) が最高であると言われるように。§4 同様に、多くの善法が生じて、それらはすべて…。例えば、木質〔を用いる〕香木 (sāra-gandha) の中で、赤梅檀香 (lohitā-candana) が最高であると言われるように。§5 同様に、多くの善法が生じて、それらはすべて不放逸を根本とし…。例えば、陸地の花々の中で、雨期に咲くジャスミン (mallikā) が最高であると言われるように。§6 同様に…

問題点 紙幅の都合で細かい解説は割愛せざるを得ないが、この断簡がレヴィの出版した『ウパーリ経』断簡と如何なる関係にあるかが問題である。断簡の正確なサイズは不明であるが、外観からすれば、これは相当大部な写本の一部であると考えられる。無論、これには二つの経典が連写されているので、単独経典の写本ではない。また『ウパーリ経』と同じ写本セットの中に保存されている。さらに、『ウパーリ経』断簡の表面の左欄外には‘ma’の文字が書かれていて、これは *Madhyama-āgama* の略号のように見える。またつけ加えれば、二つの断簡はサイズと書体が同一で、糸穴の位置も同じである。『ウパーリ経』は漢訳『中阿含』の第133経、この断簡の二経は135・141経と、中抜けはあるものの近い場所で続いている（残念ながら葉番号は破損のため読めない）。これらの点から、二つの断簡は、ひとつの梵文『中阿含』の巨大な写本から奇跡的にほぼ完全な形で現存する二葉であると見なしてよいであろう。では、本断簡に現れる二つの経典が、漢訳『中阿含』の135・141経と、連続しないで中抜けしているのは何故であろうか。この問題については、ドイツ探検隊のトゥルフェン写本の412番が参考になる。それは西域・天山南路のショルチュクで発見された『中阿含』の梵文断簡で、そ

の中の30番という『中阿含』135経の末尾に対応する断簡では、裏4行目で135経が終わった後、次の5-6行目に散見される文章は、破損が激しいが、カトマンドゥ断簡の裏1行目から始まる『中阿含』141経の文章に他ならない⁸⁾。中央アジアで発見された梵文『中阿含』も、135経から141経に直接続いていたのである。時代も場所も遠く離れた二つの梵文『中阿含』の構成が一致し、説一切有部系とされる漢訳『中阿含』の構成がそれと異なるというのは不思議である。カトマンドゥと中央アジアの『中阿含』も説一切有部系と考えるのが無難なところであろう。すると、同じ有部系といっても、構成の異なる複数のヴァージョンが流布していたことになるのであろうか。それとも梵文断簡の属する『中阿含』は、完全版から抜き出された簡略版とでもいうべきもののなのであろうか。

- 1) S. Lévi, “Notes Indiennes”, *Journal Asiatique* (=JA), 1925- I, pp. 17-69 (*Upālisūtra*, pp. 26-35). 1922年の旅行については JA, 1923- II, p. 359, 『二十論』については Lévi, *Vijñaptimātratāsiddhi*, (Paris, 1925) p. 10 (第20偈) 参照。
- 2) ベンドール写本については拙稿『解深密経』における菩薩十地の梵文資料：『瑜伽論』撰決択分のカトマンドゥ断片より』『佛教大学総合研究所研究紀要』第2号, pp. 59-77の「まえがき」を参照。また本稿で取り上げる断簡については、拙稿「ネパール系古層写本の新比定」本誌39巻1号(1990) pp. (116)-(120) で一言触れた。
- 3) Bendall, *Śikṣāsamuccaya* (*Bibliotheca Buddhica*, I), p. xxvii, p. 291, n. 7 参照。この写本については、ネパール文字による別写本(同様の散文ヴァージョン)と併せて、ユネスコ東アジア文化研究センターの *Bibliotheca Codicum Asiaticorum* の1冊として、1996年3月に影印版で出版される予定である。
- 4) 筆者は Nepal/German Manuscript Preservation Project の撮影したマイクロフィルムを使用している (Reel No. A934/20)。
- 5) 対応資料：(1)『中阿含』(No. 135 善生経) T. 1, 638c-642a, (2)『長阿含』(No. 16 善生経) T. 1, 70a-72c, (3)『仏説尸迦羅越六方礼経』T. 1, 250c-252a, (4)『仏説善生子経』T. 1, 252c-255a, (5) Pāli, *Sīgālovāda-suttanta* (DN, III, pp. 180-193). なお、本経の経名をめぐる問題については、並川孝儀「Mahākarmavibhaṅga 所引の経・律について」『佛教大学研究紀要』68号(1984) pp. 62-66 参照。
- 6) 対応資料：(1)『中阿含』(No. 141 喩経) T. 1, 647b-648a, (2) Pāli, *Samyutta-Nikāya*, 45(140)-45(148), SN, V, pp. 43-45. cf. 『雜阿含』(No. 1239) T. 2, 339b-c, 『別訳雜阿含』(No. 66) T. 2, 396b-397a, SN, I, pp. 86-87 (3.2.7).
- 7) 偈頌番号、偈頌部分のダンダ、および段落番号は便宜的に示したもので、写本上の根拠はない。和訳においては、經典冒頭の慣用句、繰り返される同文を省略した。
- 8) *Sanskriithandschriften aus den Turfanfunden*, Teil IV (Wiesbaden, 1980), pp. 20-73, 30番断片については, pp. 61-63 参照。